

# 第18回経済地理学会大会

大会プログラム  
シンポジウム報告要旨

1971年4月29日

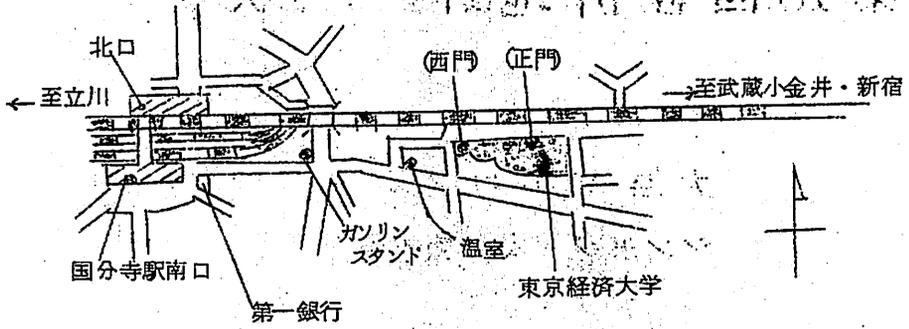
於 東京経済大学

# 会場案内

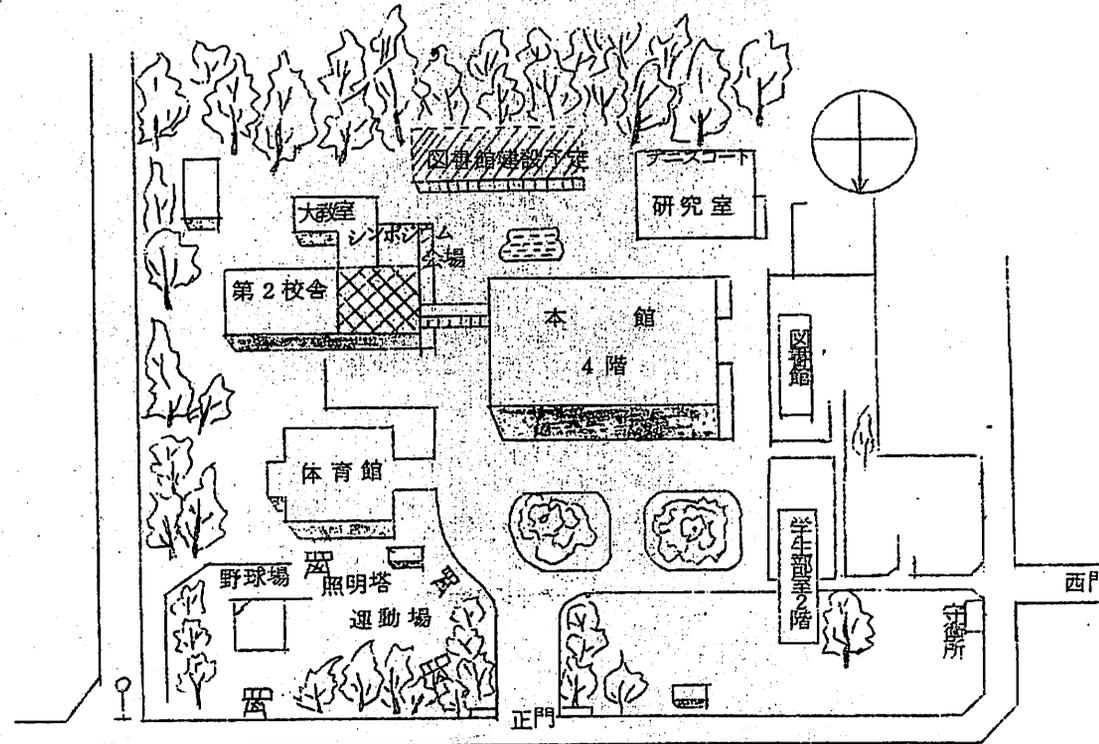
東京経済大学

東京都国分寺市南町1丁目7番地 TEL (0423) 21-1941~5)

国電中央線 国分寺駅 南口下車 徒歩10分



# 会場案内図



# 大会日程

日 時 昭和46年4月29日

9:00	開場・受付
9:15	開 会
9:15~13:00	シンポジウム討論
13:00~14:00	昼 食
14:00~17:00	シンポジウム討論
17:00~17:40	総会および会長挨拶
17:40	閉 会

## シンポジウム プログラム

9:15~13:00 シンポジウム報告

テーマ 「地域区分論の再検討」

座 長 森滝健一郎 金田昌司 太田 勇

報告者 西川大二郎

「問題提起 — 昨年度シンポジウムの座長として—」

奥野 隆史

「地域区分と因子分析 — 名古屋地域の場合 —」

大貫 俊

「農業地域区分に関する諸問題」

野原 敏雄

「経済地域区分論の科学的基礎」

奥山 好男

「ふたたび地域概念について、そして地域区分の有効性について

— 奥能登の地域調査を例として —」

13:00~14:00 昼 食

14:00~17:00

シンポジウム討論

座長

森滝健一郎 金田昌司 太田 勇

17:00~17:40

総会および会長挨拶

(尚 昼食は、当日会場で、午前11時まで、折詰弁当 — 3,000円 — の予約をうけ  
つけますから御利用下さい。)

## 地域区分と因子分析

— 名古屋地域の場 合 —

奥 野 隆 史

地域区分は、現実の地域から提供される多くの情報に秩序や一貫性を与えて整理し、それによって area を分類して region にする手続きである。この手続きが科学的かつ合理的であると、(1) region に正確な名称が与えられ、その名称は科学の共通言語となる、(2) その言語自体 region の特性を表現しているの、これについての情報を伝播することになる。(3) そしてさらに分類成果である region を比較すると、それがもつ特性の帰納的一般化ができる。

科学的かつ合理的な手続きは、分類対象の個体 (area) がもつ諸特性のうちすべての個体が共有しかつ分類目的に応じて選定される特性 (分化指標) の類似性、または個体の関係に基づいて、その個体をいくつかのクラスに、そしてそのクラス自体を順次グループ化することである。個体は本来的にいくつかの特性をもつが、個体がグループ化される過程においてその諸特性が相対的な意味において明確にされ、その結果個体はすべての個体の集合であるユニバースのなかで位置づけられる。また、いくつかの個体がグループ化されたクラスの場合も同様である。明確にされた特性をもち、かつユニバースのなかで位置づけられた個体またはクラスが region である。

個体があつ諸特性のなかからの分化指標の選定は、分類目的によってなされることはいうまでもないが、われわれが対象とする個体は無限またはそれに近い数の特性を有すると考えられる。それらから分類目的に適する有限の分化指標を選択することになるが、その選択手続きは客観的でなければならない。そして選択された有限の指標の重要性による指標の順序づけ、および順序づけされた指標の類似性による分類が次段階の分類手続きとなるが、その順序づけと類似性の判定に際しての前提条件となる指標の独立性の充足が重要課題となる。この3課題について因子分析の1つのタイプである主因子型分析 (主成分分析) は有効である。この分析によって得られた、いくつかの条件をみたされた分化指標の類似性の判定に次元分析 dimension analysis が役立つ。そして、次に類似性に基づいて個体をグループ化してクラス

にする訳であるが、一貫したルールによるこの手続きがグループ化分析 (grouping analysis) である。また、主因子型分析は、個体間の関係を測定し、それに基づく分類にも役立つ。

### 主成分分析と主因子分析

主成分分析と主因子分析の比較

主成分分析 (PCA) と主因子分析 (PFA) は、ともに多変量データの次元削減と構造解析に用いられる手法である。両者は数学的に密接に関連しているが、その目的と解釈に重要な違いがある。

主成分分析は、データの分散を最大限まで捉えるために、データの相関構造を無視して、データの固有変数 (主成分) を抽出する。主成分は互いに直交し、データの分散を最大限まで説明する。主成分分析は、データの相関構造を無視して、データの固有変数 (主成分) を抽出する。主成分は互いに直交し、データの分散を最大限まで説明する。

主因子分析は、データの相関構造を考慮して、データの潜在変数 (主因子) を抽出する。主因子は互いに相関があり、データの相関構造を最大限まで説明する。主因子分析は、データの相関構造を考慮して、データの潜在変数 (主因子) を抽出する。主因子は互いに相関があり、データの相関構造を最大限まで説明する。

主成分分析と主因子分析の比較

主成分分析は、データの相関構造を無視して、データの固有変数 (主成分) を抽出する。主成分は互いに直交し、データの分散を最大限まで説明する。主成分分析は、データの相関構造を無視して、データの固有変数 (主成分) を抽出する。主成分は互いに直交し、データの分散を最大限まで説明する。

主因子分析は、データの相関構造を考慮して、データの潜在変数 (主因子) を抽出する。主因子は互いに相関があり、データの相関構造を最大限まで説明する。主因子分析は、データの相関構造を考慮して、データの潜在変数 (主因子) を抽出する。主因子は互いに相関があり、データの相関構造を最大限まで説明する。

## 農業地域区分に関する諸問題

大 貫 俊

いまさら、ことあたらしく農業地域区分に関する問題点を論じなければならない必要は何故であろうかと自らに問い許りで、要旨提出の期限においこまれてしまった。したがって、ここでは論旨を整理する余裕もないままに、若干皆さんに討議して頂く素材を並べておくにとどめたい。

地域区分を行なうこと自体が地理学の最終的な研究目標であるというようには私は考えていない。とすれば、何かの目的のために、その手段として地域区分が必要とされるといことになる。

農業地域区分という用語が、農業地域の区分ということであれば、農業地域なるものの概念規定がまず明らかにされなければならない。しかし、仮に農業の地域区分という意味で用いられているとすれば、農業地域とは一体何であるかという問題をあまり考えなくとも、何らかの指標にもとづいて区分を行なうことは可能である。戦後農学関係でさかんに地域区分が行なわれたとき、地理学者の農業地域区分が「役に立たない」と批判された根底には、このような問題意識のずれがあったのではないか。

日本国内の農業地域区分であれば、われわれはどうしても市町村別あるいはそれより大きい行政区画ごとに集計された統計数字の中から区分指標を選択する。そのことからくる資料上の制約（とくに異質性が平均化されること）を十分配慮するとともに、区分の境界線のもつ意味についても考えておく必要がある。

統計値とくにセンサスの場合は、1戸1戸の経営体の集計にすぎない。したがって、市町村のような空間をカバーした統計数値を単元として取扱っても、所詮農家の集合値にすぎない。そこで、農業地域とは $\sum$ （ $\rightarrow$ ）農家以外の何ものが含まれているのかという、地域概念の検討が不可欠となる。

ウィーバーのクロップコンビネーションが、農業地域区分を理論的に客観性を高めたものとして、わが国で高く評価されているようであるが、彼の発想に対して私はいかねがね疑問をもっている。この際その点を指摘したい。

結論的にいま私が考えていることは、1枚の地図に完全な農業地域区分図を作成することは無理であり、それよりも基本的あるいは重要な視点からの区分図が複数あってよい。そして、それらが経済の動きによって書き改められに行くことが必要ではないかということである。

# 経済地域区分論の科学的基礎

野原敏雄

ふつう、「経済地域は、経済現象の場所的な差によって区分する」といわれている。しかし、これだけでは地域区分の根拠に何ら答えていることにはならない。区分論の基礎には、当然、経済地域とは何かを厳密になさなければならぬ。とりあえず、次のことを検討しておきたい。

## 1. 経済現象の場所的な差とは何なのか、あるいは、何を差とみるのか。

研究の対象である地表の経済現象はたしかに場所的にみてまさに多様である。だからよくいわれるように、各自がその目的に従って、主体的に地域を構成すればよい、地域区分が正しいか、正しくないかという問題はあり得ないという立場に立つならば、地域区分論は無意味である。これに対して、経済現象の場所的な差がある必然性にしがって成立していること、その必然性にもとづく差異こそ地域区分の基礎となるという立場に立って、はじめて地域区分論は意味をもつ。この場合、差をもたらし必然性として、経済外事象の作用ないしは影響と、経済的諸関係の作用が考えられるが、前者は主として環境論であり、容認できない。したがって、経済地域区分にあたっては、経済法則にもとづく経済現象の展開過程を通じてつくられる場所的な差がとりあげられることになる。そこでさらに、

## 2. 経済現象の展開過程を通じて、何故その地域差が必然化するのかという問が生ずる。

経済現象が地域差をもつためのもっともプリミティブな基礎条件は商品流通である。これを媒介とした地域間関係を通じて、地域の経済的特性が形成される。

さらに、地域形成の基礎要因は商品生産の様式である。商品生産の過程は、時代により生産関係により程度はことなっているが、つねに何らかの形で土地を媒介としているために、地域的特性が成立する。具体的な例をあげれば、生産技術が低く、労働過程における土地の役割が大きい「小営業段階」では、自然的・歴史的な差にもとづく地域的分業が行なわれ、地域特化がみられる。また資本制生産を代表する工場制工業の場合は、工場内分業、集積の利益が大きくなり、土地はただ「一般的生産手段」あるいは位置としてのみ作用するにとどまる傾向が強い。資本は経済的に合理的な位置を占有し、そこに労働力、原材料などを集め、その他立地点を核

に経済的諸条件を組織する。ここに、資本によって構成された経済地域が成立する。それは、資本の集積規模、独占度、総じていえば資本間関係によって、規模あるいは性格を異にする。過密と過疎であらわされている今の日本の地域構造の性格も、その一形態である。

かように、経済地域は、生成し、発展し、変化する歴史的なカテゴリーとして、動態的に把握されるべきである。そして、その動態の法則の理解を通じて、住民生活の向上に適した経済地域形成の途を探究していくことができる。

ふたたび 地域概念について  
そして  
地域区分の有効性について

—— 奥能登の地域調査を例としつつ ——

奥山好男

はじめに 地域とはなにか

I. どんなふうに地域は設定されるか

II. どんなふうに地域を調査するか

あいだに 地域とはなにか。

III. なんのために地域を調査するか

IV. なんのために地域は設定されるか

むすびに 地理学とはなにか

} 略

2年にわたる「地域論」討議の最終報告者として、総括的な発言をおこなう。

はじめに 地域とはなにか

地域は空間である。

空間は、物質の存在の前提である。このことは、つぎのふたつを意味する。ひとつ、空間は、絶対的な存在である — 相対的な概念ないし仮説でない。ふたつ、空間は、物質とは違ったもの、それとは独立のものである — あたかも、時間が、変化とは違ったもの、それとは独立のものである、というように、空間も時間も、いわゆる「実在」なるものでなく、いわんや「有機体(統一体: complex)」などでない。

つまり —。認識できるような物質・変化がまったく存在しない空間・時間は、空間・時間でないどころでなく、むしろそれこそが、純粋な、したがって真の空間・時間そのものなのである。じっさい、空間概念・時間概念をまったく純粋に、とらえようと思えば、われわれは、なにも存在しない空間・時間を表象しなければならない。 — ということになる。

地域概念は、空間概念である。概念は、相対的である。科学は、相対的概念をもって絶対的存在を、相対的法則をもって絶対的真理を再構成する人間の観念の所産である。われわれは、この地域概念をもって、この相対的概念をもって、社会・経済を、絶対的存在（物質・変化）を再構成する。われわれの観念に所在するところの地域は、この地域概念である（以下、これを地域と称する）。

わかりやすく言えば、地域 — ということは空間 — は、容れものである。もうひとついうと、それは、外見（外被：形式）である。中身（内容）は、社会・経済（物質・変化）である。われわれは、その外見をもって、この中身を表現する（表現しようとする）ものである。だから、われわれは、いま、空っぽの容れものを用意した。そして、いわく、

「人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません」 <マタイ、Ⅹ-17>  
と。われわれは、中身に合わせ、外見を選ばなくてはならない。

#### I どんなふうに地域は設定されるか

大貫は、ぶどう酒として、農家（つまり、農業経営・農業家計 — それも、農林省の定義するところのそれ）をとる。そして、ほほ似かよった農家を、できるかぎり漏らさないように皮袋をかぶせる。この場合、非農業的な経営や家計は入れられない。じっさいには非農業的な経営や家計のほうが、全体として、農家よりも多いのである。が、容れものは、もともと空っぽで、それらは、もともと捨てられたかじり、入っていなかったのである。かれの農業地域は、山岳・森林・市街地を捨象して、設定される。

高野の場合も、同様である。ともに、stock（固定量）視点から、地域は設定される。これらの地域は、古典地理学でいう<同質>地域である。

野原は、flow（流動量）視点から、地域を設定する。この場合<flow>とは、商品の流通・循環、つまり交換である。つげくわえていえば、資本制社会にあっては、労働力は一個の商品であり、生産過程は、とりもなおさず、一個の交換過程である。この観点から、野原は、「局地図」とも言われるような（地方中小都市を中心とする）社会—経済圏が崩壊し、「広域圏」とよばれるような（主要大都市を中心とする）社会—経済圏が成立する、という発展過程を追及する。

この野原の観点は、「生産・流通にかんする核をもち」「経済の地域的循環が独立して行なわれる」という「経済循環の地域的完結」をもって、<地域経済>を設定する川島哲郎（1965）のそれと共通する<地域経済、経済学辞典、1.9.65 岩波書店、p.758>

川島(1963)は、また、機械工業は「もっとも平均した地理的分布、しばしば全工業の平均以上に平坦な地理的分布をしめす」としている<日本工業の地域的構成, 経済学雑誌 48-4, 1963, p.27> また川島(1965)は、これら地域経済間の完成財をつうじた水平的分業、これら地域経済の特定の完成財生産への特化を、検出している<イギリスの産業立地政策について(1), 経済学雑誌 54-5, 1965, pp.14-7>

川島のもつ地域像は、むしろ、自由資本主義下のそれであり、野原のは、むしろ、独占資本主義下のそれである。報告者(1971)のもつ具体的な地域観は、「工業の立地と都市の景観」に示されてある<経済地理学年報 17-1 1971>

いずれにせよ、川島—野原の地域は、古典地理学でいう<機能>地域である。とともに、川島のそれからも、すでに明らかなように、これは、<同質>地域である。このことは、このシンポジウムにおいて 国松久弥(1970)が指摘している<経済地理学年報 16-2, 1970 p.72> 同様のことを、入江敏夫(1967)も述べている<地域概念と地域区分の基本問題, 社会科教育 1967-12, pp.6-7>

とすれば、大貫・高野—野原に共通するものがある。ひとつ、ある物質なり、ある物質のある変化なりを選びとること — 前者がstock視点からの、後者がflow視点からの それである。ふたつ、それぞれを、ある指標のもとに括(くく)る。みつ、括られたそれぞれを漏らさないように、皮袋をかぶせる。すなわち、これである。

つまり、これらをつうじて存在する地域は、空っぽの容れものである、ということである。意識すると、しなやかかわらず、ここにあるのは、森羅・万象、神社・仏閣を漏れなく盛りこんだ「地域」なるものでない。地域は、そのような即自的存在でない。地域は、選ばとられたもの(ある物質・ある変化)を容れるところの対自的概念である。では、なにを、どんなふうに、なんのために、選びとるか、それが、問題である。

經濟地理学会

事務局

東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学 大学院 地理学研究室内

TEL 東京(293)5811番(内線362)

振替口座 東京 12118番